

土坑-IVは、短径が68cm、長径が1m2cm、深さ18cmの長楕円形の土坑である。埋土から弥生時代後期の土器が出土した。

溝は、幅が15~35cm、深さ5~17cmの小規模の溝である。いずれの溝からも弥生時代後期の土器の細片が出土している。

### 第3遺構面

第3遺構面で検出された遺構は、溝、土坑、柱跡である。

溝-I、IIは、溝-Iが溝-IIを横断するかたちで合流した状態で検出された。溝-Iは、幅が2m50cm、深さが1m10cmである。溝内の埋土から弥生時代後期前半の土器が整理箱に16箱出土した。溝-IIは、幅が3m25cm、深さ1m34cmである。溝内の埋土から弥生時代中期前半~後半の土器が整理箱に21箱出土した。

他の溝は、幅が12~30cm、深さ7~16cmの小規模の溝である。いずれの溝からも弥生時代中期~後期の土器が出土している。

土坑-Iは、径が1m35cmの深さが45cmの一部が突き出した円形で検出された。埋土から弥生時代中期後半の土器が出土している。

土坑-IIは、径が1m15cm、深さ51cmのほぼ円形の状態で検出された。埋土から弥生時代中期後半の土器が出土している。

土坑-IIIは、径が85cm、深さ46cmの円形で検出された。埋土から弥生時代後期前半の土器が出土した。

土坑-IVは、一辺が85cm、深さ44cmの丸みを帯びた方形の形で検出された。埋土から弥生時代中期後半の土器が出土している。

土坑-Vは、短辺が1m20cm、長辺が1m78cm、深さ28cmの変形した方形の形で検出された。埋土から弥生時代中期後半の土器が出土している。

土坑-VIは、短辺が82cm、長辺が71cm、深さ24cmの楕円の形で検出された。埋土から弥生時代後期前半の土器が出土している。

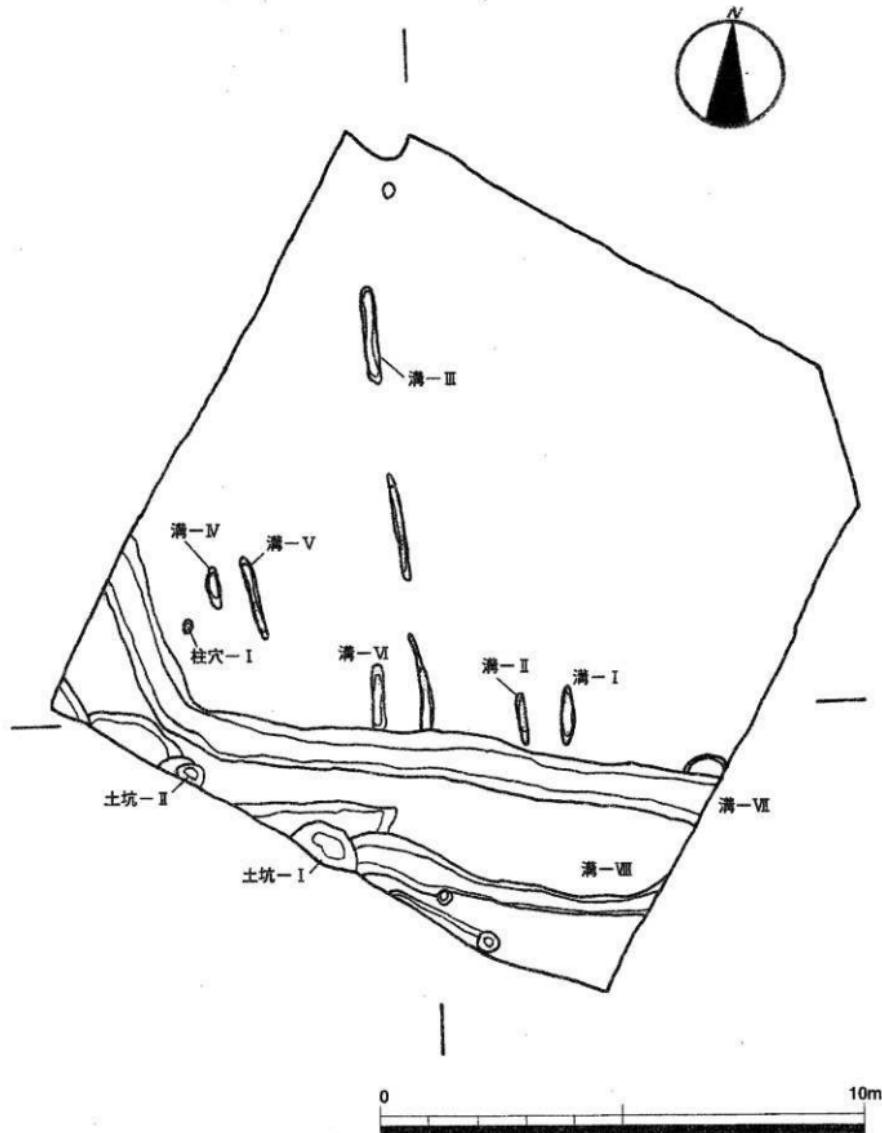
土坑-VIIは、短辺が1m15cm、長辺が1m78cm、深さ25cmの変形した方形の形で検出された。埋土から弥生時代後期前半の土器が出土している。

柱跡は、調査区全域で円形の壠形である。径が15~25cm、25~35cmに分けることができる。壠形の埋土から、弥生時代中期、弥生時代中期及び後期、弥生時代後期の土器が出土するものとがあり、弥生時代中期から後期の柱跡であると考えられる。

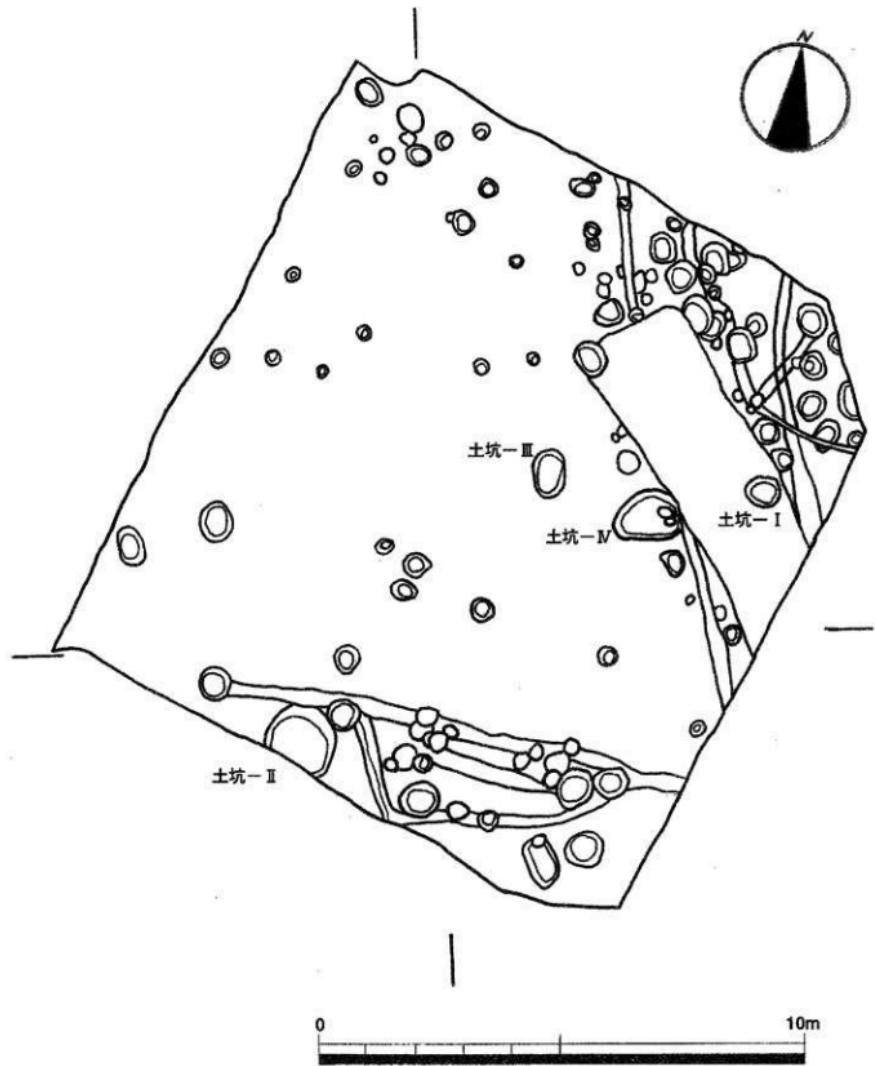
### まとめ

今回の調査で、遺構面を3面確認することができた。第1遺構面は、須恵器が伴う古墳時代以後の生活面と考えられる。第2遺構面は、弥生時代後期後半から須恵器の伴わない古墳時代前期の生活面である。第3遺構面は弥生時代中期から後期前半の生活面と考えられる。

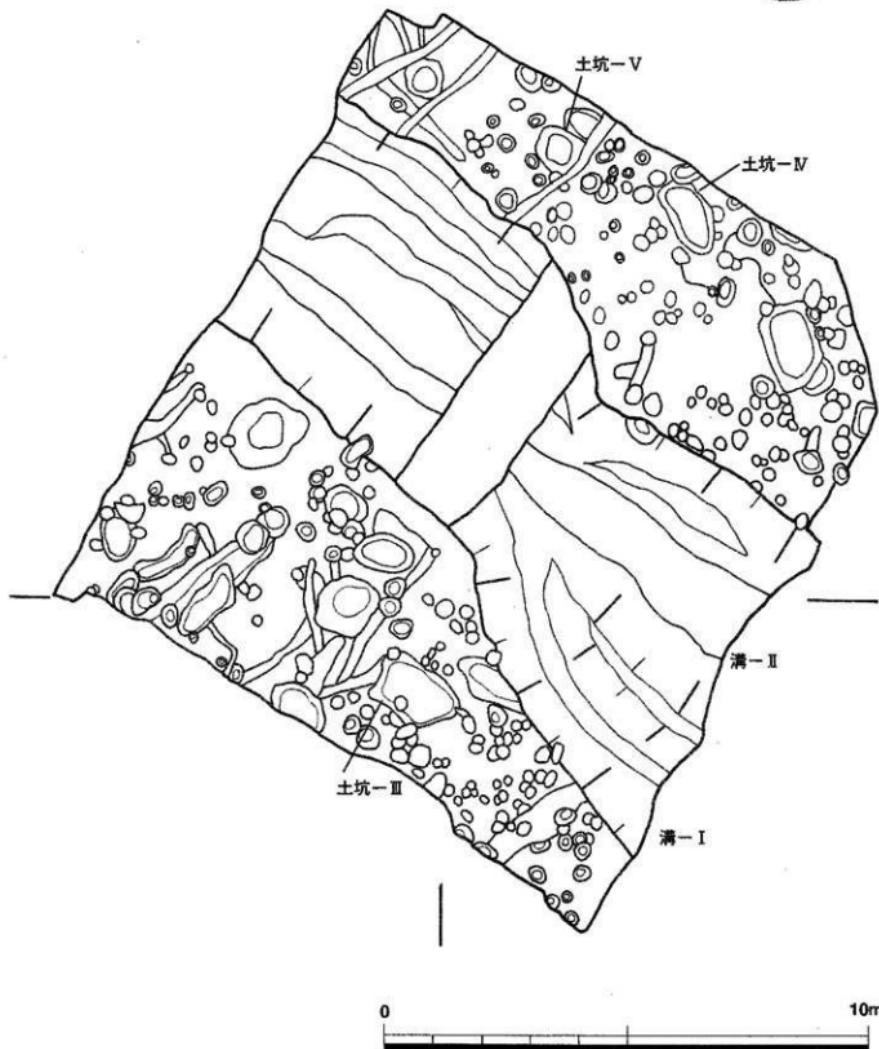
調査地域では、弥生時代中期以後古墳時代前期にかけて集落として利用されていたが、古墳時代中期以後衰退して、第1遺構面に検出された鋤溝でわかるように田として利用されていったのであろう。



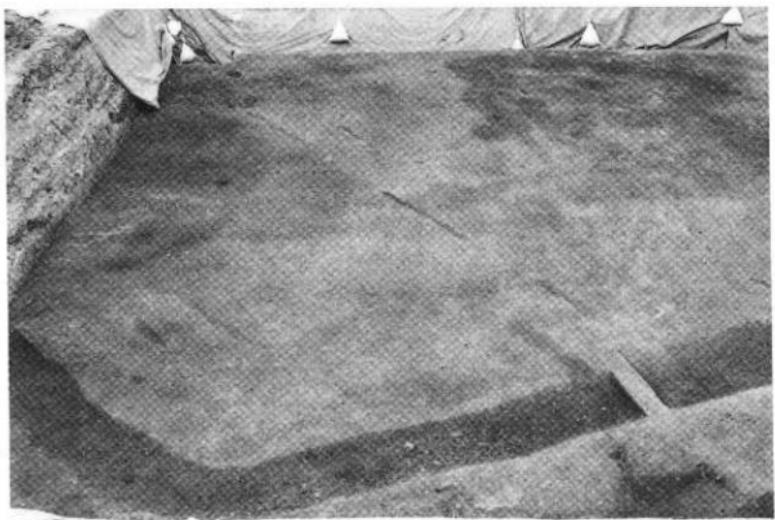
第24図 東奈良遺跡 平面図（第I遺構面）



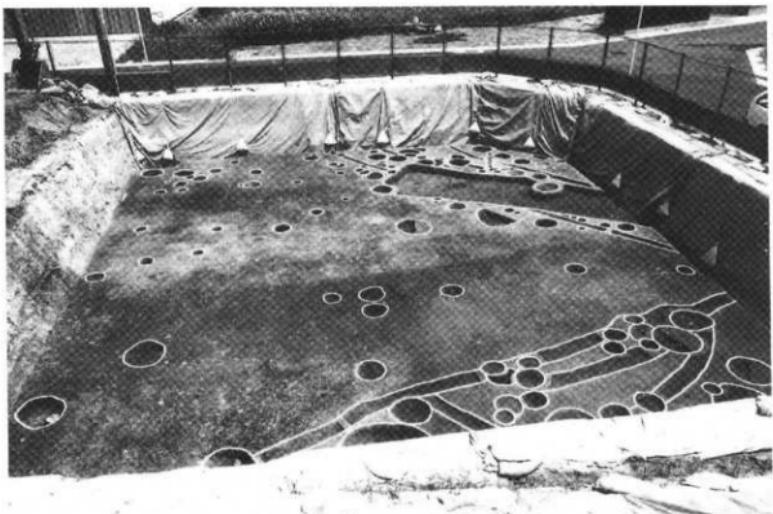
第25図 東奈良遺跡 平面図（第Ⅱ造構面）



第26図 東奈良遺跡 平面図（第Ⅲ遺構面）



第Ⅰ遺構面（南から）



第Ⅱ遺構面（南から）



第三造構面（東から）



第三造構面（南から）

## 春日遺跡

所在地 茨木市上穂東町132-1

調査原因 寺院建設工事

調査期間 平成14年9月11日～平成14年10月2日

調査面積 110.4m<sup>2</sup>

調査担当 宮本 賢治

調査結果

春日遺跡は、弥生時代から中・近世にかけての複合遺跡である。当遺跡の周辺は、北では弥生時代中期から後期、古墳時代から中世・近世にかけての集落跡である郡遺跡と接し、また北東では弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である倍賀遺跡と接している。当遺跡は、地形的には、千里丘陵からのびる低位段丘と茨木川が形成した扇状地に位置している。



本調査は、平成14年9月11日から、調査区の北側から重機掘削を開始した。ただし、調査面積が敷地全体に及ぶことから、一時残土を南側に仮置きした。

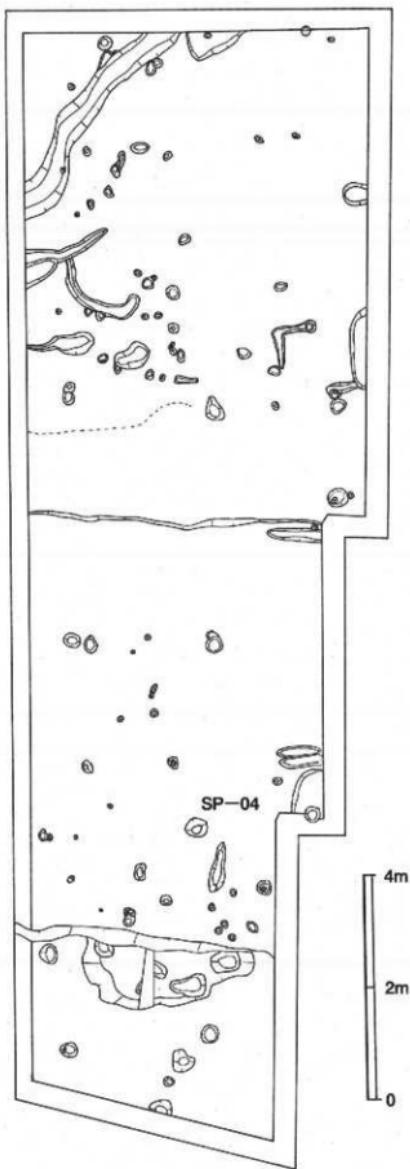
基本層序は、上層より順に盛土層（約28～79cm）、茶褐色粘質土層（約36cm）、明茶褐色粘質土層（約23cm）、黒褐色粘質土混じる）、暗黄褐色粘土層（約15cm シルト混じる）、青灰色粘土層（地山層）となる。

調査の結果、溝11条、柱穴112口、土坑2基などが検出されている。なお、調査区のやや中央の南寄りのSP-04からは、羽釜などの土器片が出土している。これらの土器出土状況から、羽釜や土器などをわざと壊して積み上げた状態が窺え、建物の柱の一角に据えられた礎石として利用したものと考えられる。このような状況は他にもみられ、おおよそ建物の南西の柱の底に土器などを積み上げた例がある。これは一種のまじないのようなものだと考えられる。またこの柱穴は、先述したように南西に据えられたものとすると、建物に関する柱穴は調査区外に出るので、どのように利用したかはわからない。このほかでは調査区の南側は、出土遺物が少ないことから時期判断は難しいが、出土した陶磁器の破片数点から、近世のものと考えられる幅が約2.6mほどの溝が西に横断している。ただし、溝の南の肩が調査区外（南に面した道路側）に伸びていることから幅は大きくなる可能性がある。

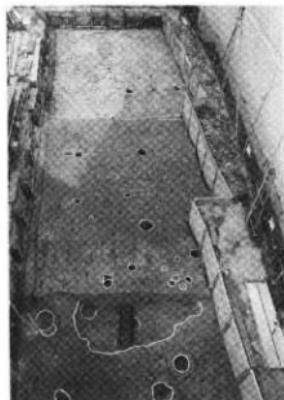
### まとめ

今回の調査から、SP-04から出土した建物と考えられる柱の一角に据えられた礎石として利用した、堀立柱建物跡と考えられる遺構を1棟検出した。今後の周辺での発掘調査でより詳細なものがわかってくるものと思われる。

参考文献 茨木市教育委員会編「平成8年度発掘調査概報」平成9年3月31日



第27図 春日遺跡 遺構平面図



遺構検出状況（南から）



遺構検出状況（南から）



SP-04 遺物出土状況（南から）

**平成14年度発掘調査概報**

発行日 平成15年3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷所 株式会社 トゥユー